



Title	健康の啓蒙 ファウスト『健康問答』と養生の言説
Author(s)	吉田, 耕太郎
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2023, 63, p. 79-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91241
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

健康の啓蒙 ファウスト『健康問答』と養生の言説

吉田 耕太郎

はじめに

1792年、北ドイツでベルンハルト・ヨアヒム・ファウストによる『健康問答』*Gesundheitskatechismus* というタイトルの教科書が出版された。この『健康問答』は肯定的な評価を得て、各地の学校の教科書に採用されることになった。本論は、この『健康問答』が広く受け入れられた背景について考察するものである。本稿の問題設定は、別の言い方をすれば、18世紀後半の健康についての言説、つまりこの時代に広く流布していた養生をめぐる言説が担っていた意義を明らかにすることでもある。

『健康問答』の問答という語が、教理問答（Katechismus）を引き継いだものであったことからわかるように、この著作は、キリスト教教義を教え込む伝統的な教材であった教理問答の型式かりて、健康維持に関する知識を、伝えることを試みたものであった。それも専門的な医学論文にアクセスできるような知識人ではなく読み物といえ、暦、聖書、それこそ教理問答程度しか目にすることができなかった、社会層を讀者として、想定したものであった。したがって今日、『健康問答』ならびに著者ファウストについて言及しようとするならば、医学知の民衆啓蒙という点からアプローチされることが普通である。問答を活用した『健康問答』は、例えば、ミルトハイムという架空の村の物語を通じて、とりわけ農民たちに実用的な知識の伝播を試みた、ルドルフ・ツァハリアス・ベッカーの『農民のための救難便覧』（1788）と同じような、一般民衆への知識の普及を模索した民衆啓蒙運動の試みに位置づけることができる¹⁾。

医学知識を伝播した『健康問答』の歴史的な意義を評価するためには、健康という主題そのものの考察も必要となる。健康とりわけ自分の健康を配慮するという態度は、自己の心身の調子を観察し、それに対して診断を下すという、自己自身への反省的な態度を醸成した。そしてまた、身体の不調が認められるとするならば、その原因として生活スタイルや生活環

1) 田口武史『R.Z. ベッカーの民衆啓蒙運動』鳥影社 2014, pp.110ff.

境への反省をうながすことになった。「自分の知性を敢えて使用せよ」と、啓蒙を定義したカントは、『緒学部争い』のなかで、医学（具体的に検討されているのはフーフェラントの養生法）と哲学の関係について論じていた。カントによれば、医学は、社会の成員の身体的な幸福を約束する学であり、その意味では、有用で強健な国民を確保しようとする、政治的権威に奉仕する学問であるが、他方で、あれやこれを真理として認めろという命令から距離をとる自由な哲学に通じる点があると説明した。これをしろ、または、あれをするな、と一方的な命令に従ったとしても、健康は維持できない。医学は、物の自然的な本性（die Natur der Dinge）、つまり人間心身の状態や病の観察から、健康を維持するための方法を導きださなければならない²⁾。人々が、上からの命令に盲信することなく、自分の心身の健康に配慮することは、一切の権威を括弧にいれて自らの知性だけでもって物事を検討する、啓蒙の態度に通じるものがあると、カントは見えていた。その意味でも、『健康問答』を手がかりに、18世紀の健康についての言説を概観することは、自らの健康を配慮する近代的な人間観が成立する条件の、一端を明らかにすることになるだろう。

本稿では、以下、『健康問答』が民衆啓蒙のメディアであったことを簡単に確認し、その後、18世紀の健康についての言説である養生について、具体的に検討することにしたい。

教育メディアとしての『健康問答』

すでに述べたように、『健康問答』は、シャウムブルク＝リッペ侯爵領の宮廷顧問官であり、侯爵夫人ユリアーネの主治医をつとめたバルンハルト・ヨアヒム・ファウスト（1755 – 1842）によって執筆された、領内の学校や教会に配布されることを前提とした薄い教科書であった。

『健康問答』が援用した教理問答とは、キリスト教教義についての問いと答えの対からなる問答が記載されたもの、いわゆる問題集のようなものであった。そもそもキリスト教教義を学ぶためには、専門書である「大全」（Summa）や、そのハンドブックとして機能した「便覧」（Enchiridion）があったが、教理問答は、教義を口頭で効率的に教えるためのメソッドとして活用されていた³⁾。そしてこの教理問答を、プロテスタントの教義を広めるために活用したのがルターであり、印刷頒布された教理問答は、宗教教育の現場に定着することになった⁴⁾。

2) Immanuel Kant, *Die Streit der Fakultäten*, in: Ders., *Gesammelte Schriften* (Akademie Ausgabe), 7.Bd., Berlin 1917, S. 26. ただしカントは本稿で検討する養生に対しては批判的であり。小鳥の世話にあげくられたり、おしゃべりしながら糸を紡いだりと、意味のないことにかかりきりになっている人が大抵は長生きするものだと皮肉をのべていた。

3) Werner Simon, 'Catechismus' im Medium Buchdruck, in: Ders., *Im Horizont der Geschichte*, Berlin 2001, S.19-48; hier S.20.

4) Hans-Jürgen Fraas, *Katechismustradition: Luthers kleiner Katechismus in Kirche und Schule*, Göttingen 1971. 第1章 "Der Kleine Katechismus Martin Luthers" を参照。

まず『健康問答』での問答を確認しておこう。例えば「もし病気になってしまった時にはどうしますか？—医者に診察をしてもらい、治してもらいます（問答 107）⁵⁾」、「家庭で用意しておくべき薬はなんですか？—新鮮な空気それから冷たい水です（115）」。「熱のある病人に近寄り、話かけてもよいですか？—病人の近くに複数人がいてはいけません。また興味本位のお見舞いも断るべきです（127）」という具体に、今日の私たちからみたら、医学的な知識と呼ぶまでもない常識的なアドバイスが収録されていた。もちろんここで、『健康問答』の医学レベルの低さを指摘したいのではない。『医学問答』は、これまで医学知の受け手とはみなされてこなかった、子どもやその親を読者としていた点から評価することが必要だ。

事実、この著作が有していた影響力は、その桁外れな出版部数からうかがうことができる。1792年に『健康問答の構想』の第1版、翌年に第2版が出版された。そして『健康問答での構想』の内容をほとんど引き継ぐかたちで、1794年に『健康問答』が出版されると、シャウムブルク＝リッペ侯爵夫人ユリアーネは、領内の学校や教会のために1000部、そしてヴェルツブルク・バンベルク侯フランツ・ルードヴィッヒ・カールもまた、領内に配布するために2000部を購入した記録が残されている。こうした大口購入に刺激されることで、1794年と95年のたった2年間で、8000部を売り上げることになった。その後毎年のように版を重ね、1800年までに8版を重ねた。さらに『健康問答』は、ドイツ外にも広がり、94年にはチェコ語訳（プラハ刊）、英語訳（ロンドンとダブリン）、デンマーク語訳（コペンハーゲン）、ポーランド語訳（ワルシャワ）が出版された。1796年には、ラテン語訳（ライプツヒ）、ハンガリー語（1795年と96年に2種類）、スラブ語 slavish（出版知はペーチ）の出版も確認できる。

「教材としての『健康問答』があまりに賞賛を受けていることについて、評者はここで何も付け加えることはありません」⁶⁾と、同時代の評者は、『健康問答』を好意的に評価していた。また同時代の受容を証言する書評も残されている。「私（評者）は、ある村で、牧師が『健康問答』を信徒たちに読み聞かせているのを目撃した。健康への配慮そして医学的な処置、とりわけ病人の理性的な扱いについての正しい理解が広まるという点で、よい効果がでることを、この牧師は確信しているのであろう」⁷⁾。村の教会学校のような場において、『健康問答』が教科書として利用されていたことがわかる記録だ。さらにまた、著者のファウスト自身が、「この著作『健康問答』は、もはや私の所有物ではありません」⁸⁾と、『健康問答』の海賊版の出版を許容する発言を残していたことから（ただし質の良い紙に印刷し、問答の順番をいれかえず、銅版画もオリジナルと同じものを使うという条件を提示している）、『健康問答』

5) 以下、『健康問答』からの問答は（問答の番号）で示す。

6) *Intelligenzblatt der Neuen Allgemeinen Deutschen Bibliothek*, Nr.12 (1793), S.95.

7) *Allgemeine Literatur-Zeitung*, Nr.41 (1795), S.327-328.

8) *Intelligenzblatt der Allgemeinen Literatur-Zeitung*, Nr.59, S.467

の海賊版が、各地で出版されたことも確認できる。

「今後私たちは、この教理問答という形式を用いた、類似の著作をたくさん目にするようになるだろう」⁹⁾と、ファウストの『健康問答』の教材としての可能性を指摘する書評も確認できるように、『健康問答』の詳細な注解書や、その内容に基づいた短編をおさめた補助読本が出版されたことが確認されている。早い例として、すでに1795年には、アウグスブルクにて『健康についての問答』（わずか38ページ）というファウストの『健康問答』をさらにコンパクトにまとめた本が出版されていた。また同年には、トーマス・レヒライトナーの『学校そして田舎の人たちへの健康問答』が出版されている。

「問い：田舎の人の医学の偏見はどのようなものですか？—答え：瀉血、下剤を治療法と信じ、理性ある医師をばかにし、無学で無知な外科医を信じることです。」

問い：田舎の人の医学の迷信はどのようなものですか。—答え：魔術師、魔女、幽霊などなどへの害のある誤った信仰。そして自然に治癒するような病では、神を賛美してしまうこと。」¹⁰⁾

このレヒライトナーの問答は、医学知の伝播を目指にしているというよりも、医学についての迷信を正そうとする啓蒙的な性格の強いものであったことがわかる。

本稿の後半でも考察することになる『人の生を長くするための術』と題されたフーフェラントの養生の教えのエッセンスを、教師と生徒の問答形式にまとめた『民衆の健康問答』の内容をみてみたい。「先生。私たちは、学者や優秀な学生に向けた講義、つまり真理を語って欲しいわけではありません。そのような講義を私たちは理解できないのです。是非、私たちにとって一番必要なことを分かりやすい仕方教えてください」¹¹⁾。まさに問答型の教材の必要性を訴える生徒の言葉でもってはじまるこの問答集では、つぎのような問答がおこなわれていた。

「(生徒) 先生、空気は、生きるためには欠くことのできないものだとおっしゃいましたか？」

「(教師) 私たちは、空気なくして生きている生き物をみつけることはできないし、生き物のいる場所から、空気をなくせば、まもなく死んでしまいます。[…]

「(生徒) 先生、水について付け加えることはありませんか？」

「(教師) 水もまた、酸素を含んでいるという限りにおいて、生物の友なのです。[…]

教師の返答には短いながらも必ず説明が付いており、さらに問答のテーマに関連した1ページ程の読本も随所に挿入されていた。このような構成から明らかになるのは、問答とい

9) *Intelligenzblatt der Neuen Allgemeinen Deutschen Bibliothek*, Nr.12 (1793), S.95.

10) Thomas Lechleitner, *Katechismus der Gesundheit*, Augsburg 1795, S.13.

11) Friedrich Anton Fresenius, *Volkskatechismus und Lesebuch über die Kunst des Menschen sein Leben zu verlängern*, Camburg 1798, S.28

12) Fresenius, a.a.O., S.35.

う型式が、教室で子どもたちに読み聞かせるだけで授業が成立できるように支援する、実用的な教材として機能していた点である。

研究者ザームラントは、ファウストの『健康問答』も視野にいれて、教理問答が、18世紀当時の教育メソッドとして成功した理由について論じている。ザームラントによれば、問答の教育効果は、つぎの3点にまとめられる。まず問いと答えだけの記述は、余分な説明や議論が省かれていることで、伝達すべき知識そのものにフォーカスが当てられており、そのことで、知的レベルの低い一般民衆、とりわけ子どもたちへの教授メソッドとして効果があったという点。そして、そもそも教理問答が、聖書の教義を教える教材であったのだから、問答という型式が、教会学校のような伝統的な教育機関にスムーズに入り込むことができたという点。そして問答による疑似的な教育場面の再録は、専門家ではなくとも、例えば家庭で親が子どもに読み聞かせるような受容の場面においても、一定の教育効果が期待できたという点である¹³⁾。

『医学問答』が、家庭という場において受容されていたことは、著者ファウスト自身も気がついていただろう。すでに『医学問答の構想』第2版には、親に向けてのメッセージが加筆されている。具体的には、健康な子どもは、健康な両親のもとで誕生するのであるから、子どもたちが健康に育つためには、道徳的に優れた両親の教育が必要である。そのためにも、まず親も一緒に『健康問答』を読み、どのように子どもの健康を配慮したらよいか学ばなければならないという情報が追加されていた。

『健康問答』と医学

17世紀以降の医学知の普及をたどった研究のなかで、グンドルフ・カイルは、医学知の伝播を目的とする実用的な著作では、各症例にあわせての応急処置や、薬の調合などをはじめとする実用的な情報が記載されていることが多いことを指摘している¹⁴⁾。もちろんカイルの研究は、民衆向けというよりも、専門書に類される著作を主な史料として扱っているのだが、ファウストの『健康問答』のなかで扱われている医学的な処置といえば、発熱を伴う疾患の対応、伝染病の見分け方とその対応、種痘の必要性の訴え程度であった。もちろん、ファウストが読者として想定していたのは子どもであり、子どもたちが薬の調合などできるわけがない。むしろ普段から健康に配慮し、身体に異常があれば、自分たちで誤った判断や処置

13) Irmtraut Sahmland, Der Gesundheitskatechismus - ein spezifisches Konzept medizinischer Volksaufklärung, in: *Sudhoffs Archiv*, 75.Bd. (1991), S.58-73; S.58-62.

14) Gundolf Keil, Die Gesundheitskatechismen des Breslauer Stadtarztes Martin Pansa (1580-1626), in: Klaus Garber (Hg.), *Kulturgeschichte Schlesiens in der Frühen Neuzeit*, 1.Bd., Tübingen 2005, S.287-320; S.289.

をすることなく、ましてや迷信まがいの治療に手をだすことなく、正しく医者に診断を仰ぐべきとする、健康維持の最低限の習慣づけを、ファウストは目指していたのであろう。

とはいえ、中途半端な医学的な知識と処置が扱われているだけの『健康問答』に対しては、医学者から厳しい批判が寄せられていた。著者ファウストも、自らの著作が不完全であることを率直に認めており、「間違いや足りないところがあれば教えて欲しい、またどうすればこの著作がよりよいものになるのか、是非とも教えてほしい」¹⁵⁾と呼びかけていた。同時代の書評のなかにも、『医学問答』には「たしかに不完全ではあるが、数多くの有益さをもたらしてくれる唯一の本である」¹⁶⁾と、簡易な内容であるからこそ教育現場で活用されう点を強調しているものや、批判する専門的な医学者に対して、「このような医学的な批判をすべきではない、というのも、この『健康問答』は、医学の素人、医学の専門化ならざる人たちに向けられたものであり、医師に向けて書かれたものではないのだから」¹⁷⁾と『健康問答』を擁護した記事が確認できる。

ここで『医学と外科の新聞』（以下、『新聞』）に掲載された、『健康問答』への批判を検討することにした。その刊行によせた前書きから、この新聞は、教養層（das gelehrte Publikum）を読者として想定していたことがわかる。『新聞』の目的は、かれら教養層に、専門的な医学知識を与えること、そのために経験豊かな医師が執筆した医学論文（海外で出版されたものも含む）を紹介すると宣言していた¹⁸⁾。もちろんこの『新聞』誌上では、専門的なならざる『健康問答』は批判の対象として位置付けられていた。しかしこの批判を手がかりに、『健康問答』が医学とは異なる知的かつ文化的なコンテクストのなかで成立してきたことを理解することが可能となる。

『新聞』が『健康問答』へ向けた第一の批判は、その記載内容の誤りが訂正されていない点であった¹⁹⁾。しかし、すでに確認したように、『医学問答』では、専門的な医学的知識というものは記載されてはいなかった。とするならば、たとえ間違った記述があったとしても、薬を誤って処方したり、病気やケガを悪化させたりするようなことはなかったとおもわれる。この批判を、別の視点から言い換えるならば、出版部数の桁外れに多かった『医学問答』のメディアとしての影響力への牽制、つまり、誤りを含んだ医学知識が、必要以上に拡散してしまうことへの危惧であったといえるだろう。それは具体的には、ヒュネッケが指摘するような、専門的な知識が制御できなくなることへのこの時代の医学者が共有していた危機意識

15) *Intelligenzblatt der Allgemeinen Literatur-Zeitung*, Nr.49 (1793), S.391.

16) *Gothaische gelehrte Zeitungen*, 2.Bd. (1794), S.607.

17) *Allgemeine Literatur-Zeitung*, Nr.41 (1795), S.327-328.

18) Vgl. Johann Jacob Hartenkeil (Hg.), *Medicinish-chirurgische Zeitung*, 1.Bd. (1790), Salzburg, Vorrede.

19) Vgl. Hartenkeil, a.a.O., 3.Bd. (1794), S.103.

の表明であったといえる²⁰⁾。

記述の誤りに加えて、問答という型式そのものも批判されていた。「このソクラテスのメソッド」²¹⁾（と『新聞』は問答を揶揄している）では、おうむ返しがおこなわれているだけであって、教えを受ける側が、医学的な知識を本当に理解しているのかがわからないというのである。このような問答への批判は、当時の教育学でも行われていた教理問答の批判的な検討に同調したものだ。教育学者ヨアヒム・ハンリヒ・カンペは、教理問答は無用の長物、口先だけで教義を繰り返すだけのもの。むしろ信仰では、心または知性でもって理解することが重要であると、答えが言えるだけで事足りるとする教理問答を批判していた²²⁾。教理問答は、聖書の字面を暗記するメソッドでしかなく、子どもたちが教義を本当に理解しているかどうかを確認することはできない。そもそもルターは、プロテスタント向けの教材がなかったことから、急場凌ぎで教理問答を編集しただけなのであるから、教理問答に代わる正しい教育法が模索されなければならない²³⁾、というのがカンペの主張であった。

『新聞』の批判の第2点は、『健康問答』が対象としている読者層が広すぎるという点だ。「この本は、全ての身分に向けたものである」²⁴⁾。つまり『健康問答』には、「農民や職人など、異なる職業、異なる身分に応じた健康への提言が見当たらない」²⁵⁾。たしかに『健康問答』は、初等教育を受ける子どもを読者として想定していたが、それ以外にも、多くの購入者がいたことはすでに述べた通りだ。『新聞』のこの批判には、身分が異なれば、生活環境や生活スタイルが異なるのは当然、的確な医学的なアドバイスをするならば、身分や職業に応じたものであるべきとする、当時の固定化した社会階層を前提とした健康論とはなっていない点が批判されていた。

そして最後の批判は、『健康問答』の健康の理解そのものへの批判であった。長くなるが、この批判の部分を引用しておきたい。

「もし、最も重要な財産である健康の維持を、人々に教えたのであれば、間違った概念や偏見を教えてはならない。したがって、健康問答をひもといて、“あれは健康であり、これは健康でない”、などという生活一般についての記述を、人々が目にするようなことがあってはならない。昨今の養生書のなかにみられる、この決まり文句こそが、いたるところで、ひどい結末を生む原因となっているのだから。私たちの身体の賢明なる仕組みは、害を与え

20) Rainer Hünecke, Das hundertjährige Alter. Medizinische Ratgeber aus dem 18. Jahrhundert, in: Jörg Riecke (Hg.), *Sprachgeschichte und Medizingeschichte*, Berlin 2017, S.217-234; S.222.

21) Hartenkeil, a.a.O., S.104.

22) Joachim Heinrich Campe, *Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens*, 5.Bd. (1786), S.408.

23) Campe, *Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens*, 16.Bd. (1792), S.38.

24) Hartenkeil, a.a.O., S.106.

25) Ebenda.

る様々な刺激に慣れることで、身体が害を受けなくなることは確認されているし、反対に、健康な人の多くが、害を与えるわけでもない様々な生活習慣の影響を受けて、健康を害しているのを、私たちは日々、目にしている。とすれば、何が健康で何が健康でないかという時代遅れの理論を叫ぶ、頭でっかちの健康の大家は、大きな間違いを犯していることがわかる。時代遅れの理論をふりかざし、悪書の検閲官のように、最も害のないものまで無条件に病の原因の目録に含めてしまう、健康教師たちは、とても哀れな、とても馬鹿げた輩だ。」²⁶⁾

この引用で批判されている健康教師とは、養生書を書いて広める者のこと、つまり養生によって健康へアプローチしようとする論者たちであった。この引用に、疾患を治療する近代的な医療と、健康の維持を目的とする養生との間に、健康についてのパラダイムの変化が生じたことを指摘することも可能である。しかし18世紀後半の医療と養生とを峻別することは容易ではない。なぜなら、古代から医療行為というものは実践され続けてきており、養生においても、体液の循環をうながすための瀉血、または消化不良をおこした腐敗物を出すための下剤を処方するような医療行為は推奨されていたからだ。そしてなにより、この時代の多くの養生書は専門的な医師が執筆したものであった。

『新聞』が批判しているのは、健康へのアプローチの仕方の違いにあったといえる。別の言い方を試みるならば、健康が損なわれた状態、つまり病を治療するという形で、健康状態へと修復を試みるのが医学であるとするれば、健康学者たちは、健康と不健康の対立項、つまり健康を促進するか、それとも不健康をもたらすかという物差しで、生活習慣や生活環境を反省し、健康を維持しようとした、その態度の違いであった。『新聞』の批判から、本稿が引き受けたいのは、『健康問答』が養生という近代的な医学とは異なる言説空間のなかで執筆されていたという点だ。ファウストの『健康問答』が、広く受け入れられたという事実から考慮しなければならないのは、『健康問答』にも通底している養生という考え方がひろく共有されていたということであり、養生によって、当時の人々は、健康を維持できると受け入れていたということなのである。

養生というアプローチ

ファウストは、(大人向けに) 育児、大気、清潔さ、衣服、飲食、住環境、天候、身体活動という項目をたて、それぞれの項目で健康にプラスとなるもの、マイナスになるものを問答型式で整理していた。たとえば大気についての問答であれば、新鮮、清潔、乾燥した大気は人間を健康にするという前置きのあとに、「悪質で、湿った、不潔な空気のなかで、人は

26) Hartenkeil, a.a.O., S.107.

快適でしょうか？—いいえ、人は快適ではありません。悪い空気の中で、衰弱し、不健康になり、落ち着きがなく、自暴自棄になり、愚鈍に、邪悪になります。そしてまた発熱したり、多くの悪い病気になったりします。それらの治癒は難しいものです（25）」。空気が汚れる原因と問えば、「人家がひしめき合っている所、また水がよどんでいる所の空気は汚れ、不健康なものとなります（27）」。

さらに、どうして人家の多い所の空気が汚れるかと問えば、「汚れた空気は、多量の発散物、しめった埃、大勢の人間が吐き出した息や排出物を含んでおり、さらに悪質の燃料油や石炭が、空気を悪くする（28）」と説明される。また食事についての問答では、「飲食のときに守るべきことは何でしょうか？—秩序と節度です（57）」と、食べ過ぎを諫め、パンについては、「ライ麦だけから作られたパンは、良質で健康に寄与する（62）」が、「ライ麦に大麦が混ざっているパンは、粗悪で、不健康だ（63）」、と子どもたちが日常接するであろう具体的な食材を取りあげて何が健康で何が不健康かを説いていた。

そもそも、この養生（Diät）または養生法（Diätetik）とは、ギリシャ語で「生活様式」を意味する *diaita* に由来するものであり²⁷⁾、医学史では、ガレノス以降、中世の医学の基本知識として位置づけられてきたものであった²⁸⁾。この *diaita* で扱うべき内容については、伝統的に、自然ならざる6つの要因と決められていた。この自然ならざる要因とは、人間を不調にする要因のなかでも、人間が自然（本性的）に備えている身体器官や体液の不調を除いたもの、つまり偶発的な要因という意味であり、大気、飲食物、活動・静養、睡眠・覚醒、排出機能と保持機能、心理状態の6つが想定されてきた。『健康問答』の構成は先ほど示した通りであって、身体の高齢物の排出や心理状態についての項目はたてられていない。ただしこれらのテーマも、衣服、飲食、身体活動のなかで言及されていた。むしろ『健康問答』の構成で着目すべきは、衣服であれば、衣服、帽子、ネクタイと具体的なものが提示されていること、飲食物についても、すでに紹介したように、パン、ワイン、蒸留酒という具合的なものを取りあげて、問答が展開されていた点である。このように点からも、『健康問答』が、子どもが読者として想定していたことが理解できるはずだ。

また『健康問答』では、伝統的な要因には含まれていない清潔についての問答も含まれていた。確かに、衛生学や細菌学が誕生する以前のことであるから、滅菌のような意味での清潔さが説かれているわけではなく、その内容は、部屋の掃除、身の回りの整理整頓である。これらは、子どもたちに生活上の一般的な規範を教え込もうとする教育的な記述であろう。また伝染病への対処について言及されている点も、指摘に値する。感染を防ぐために病人に

27) Vgl. Eduard Seidler und Karl-Heinz Leven, *Geschichte der Medizin und der Krankenpflege*, 7. Aufl. Stuttgart 2007, S.46.

28) 矢口直英「イスラム医学における「非自然要素」」『日本医史学雑誌』, 第56巻, 第1号（2010）, pp.53-66.

近寄らないようにするという経験的に得られた行動規範に加えて、当時普及しつつあった種痘についての問答もあった。種痘は、天然痘の唯一の防御手段として、子どもたちに宣伝しなければならなかった最新の医療処置であったはずだ。

このような健康と不健康を見分ける養生の習得には、どのような意義があったのであろうか。『健康問答』以外の著作からも確認しよう。ヨーハン・ゴットローブ・クリューガーの『養生』は、18世紀中葉に出版されたもので、500ページ以上にもわたって、6つの非自然的要因すべてに言及する由緒正しい養生書であった。もちろんファウストの『健康問答』とは異なり、クリューガーのこの著作は、専門家または教養ある市民を対象としたものであった。

クリューガーは、この著作のなかで、養生法は良き健康状態を維持するための方法であると定義し、養生法を身に付けることの意義を、「自分自身の医師になること、それも最良の医師になること」²⁹⁾と説明した。つまり自己の身体の状態と身体の調子を狂わせる緒要因について自ら診断するための知識を授けることが、養生法の目的だというのだ。これは自らの健康を配慮する啓蒙の考え方に近いものであることは言うまでもない。本論冒頭で言及した民衆啓蒙の推進者ベッカーも、『人間の義務についての講義』のなかで、「健康への害を回避するためにも、誰もが、養生の規則について知っておくことは義務である」³⁰⁾と述べていた。養生とは、身分の差なく、誰もが自分自身の医師になること、もちろん専門教育を修めた医師になることではないものの、自らの健康に配慮することを求めるものであったと言えるだろう。

養生が描き出す病

自分自身の医師になるという養生の意義を、18世紀後半から19世紀中葉にかけて、文化史的な観点から考察しているのがバルバラ・トゥムスの研究だ。当時の医学や哲学の文献を幅広く検討するトゥムスは、18世紀後半に人々に受け入れられることになった養生を、人間の生の解釈学と特徴づけている³¹⁾。彼女の議論をまとめるならば、養生は、医学的な観点から健康的な生活実践を求めるだけでなく、道徳的な観点からも、生活スタイルの規律化を求めるものであった。つまり養生がもとめた自分自身の医師になることとは、自己の心身を医学的に

29) Johann Gottlob Krüger, *Diät oder Lebensordnung*, Halle (1751?), S.11.

30) Rudolf Zacharias Becker, *Vorlesungen über die Pflichten und Rechte des Menschen*, 2.Th., Gotha 1792, S.93f.

31) Barbara Thums, *Moralische Selbstbearbeitung und Hermeneutik des Lebensstils, Zur Diätetik in Anthropologie und Literatur im 1800*, in: Maximilian Bergengruen, Roland Borgards und Johannes Friedrich Lehmann (Hg.), *Die Grenzen des Menschen: Anthropologie und Ästhetik um 1800*, Würzburg 2001, S.97-111; S.98.

診断するだけにとどまらず、健康を害する生活スタイルの逸脱を、絶えず監視し、心身を規律化する運動であったというのである。このような心身の規律化が求められた理由として、トゥムスが指摘するのが、専門分化する社会への対応である。トゥムスの整理を受け入れるとすれば、養生とは、全体を見渡すことのできなくなった専門知、労働と余暇の分離、社会のひとつの歯車でしかない社会的な役割など、専門分化していく社会のなかで、健康への配慮として人間性全体をつなぎとめる試みであった。それはたとえば、カントのように人間学という学問知でもって人間全体をとらえようとする試み、またはシラーのような美的な教育として人間の全体性を確保しようとする試みと関連しているというのだ。

確かに、このように巨視的な視点から考察することで、養生の意義を、人間全体をとらえなおす心身の規律化として認めることができるかもしれないが、しかし、これまで言及してきた、ファウスト、フーフェラント、クリューガーのいずれもが医師であったように、養生は、この時代の医学者による医学の言説にも属するものであったことを考慮にいれる必要がある。つまり養生が、当時の人々にひろく受けいれられていたのであれば、養生というアプローチに、一定の医療効果が認められなければならないはずだ。別の言い方をするならば、養生が受容されるためには、養生によって回復する不健康が実際に存在していた、ないしは、病の実在を素朴に想定できないというのならば、養生の言説に対応する形で、病というものがつくりあげられたと、考えなければならない。

実のところ、『健康問答』を読み返してみても、発熱それから天然痘以外に、病名の与えられた疾患は登場してこない。『健康問答』が対象としているのは、病んだ状態、特定の病名が与えられることのない不健康な状態であった。「病んでいる人は気分がすぐれますか？—いいえ、気分はすぐれません。病んでいる人にとって、食べ物や飲み物は美味しくなく、病んだ人は、風雨にも耐えられません、動くこともできません、不安そして痛みを抱えています。(4)」。まずは、文字通りに、養生は不健康な状態を問題とみなしていたと受け取るべきだろう。

例えば19世紀初めの次のような報告は、不健康という状態そのものが、問題となっていたことを理解させてくれる。「とりわけ大きな多くの都市には、知識人と呼ばれる人間が住んでいるが、彼らは心気症、メランコリー、脾臓病に病んでいる、また上流の生活を営む女性たちは、ヒステリー、蒸気症に病んでいる。あれこれ心配している商人と芸術家は、メランコリーと肝臓の病をわずらっており、職人もまたその職種によって異なる病に苦しんでいる」³²⁾。この報告は、様々な職種とそれぞれの病を列挙してはいるものの、病の分類を提示しようとしているのではない。そうではなく、自分は病んでいると理解することが流行になっ

32) Gottlieb von Ehrhart, *Physisch-medizinische Topographie der Königl. Baier. Stadt Memmingen im Illerkreis*, Memmingen 1813. S.503.

ていることを伝えていた。とりわけ引用にも登場する、(男性の)心気症と(女性の)蒸気症は、心身の不調に与えられた流行の病名であった³³⁾。フーフェラントは、この状況を次のようにまとめていた。誰もが自らの心身に、何らかの不調を感じており、そしてまたその不調に対して、医師が名前をつけてくれれば事足りるという状況だ³⁴⁾。

このような不調の再認欲求が蔓延することになった背景には、人間の身体の捉え方の変化が関係していた。なかでも先の引用にも登場してきたメランコリーやヒステリー、は、寒暖乾湿という四つの気質(Temperament)の偏りや、バランスの欠如として説明されてきた、人間の基本的な体質または性格であったが、身体の仕組みについて新しい考え方が提示されるようになると、人間の体液や血液の循環、はりめぐらされた神経組織のなかを絶えず伝達されている刺激でもって身体の状態は説明されることになった³⁵⁾。

神経を走る刺激と言っても、純粹に生理学的なものではなかった。心と身体を現象を一元的に説明しようと試みた当時の生理学の言説を確認してみれば、刺激とは、文字通り外から人間の感覚器官が受ける刺激であるだけでなく、身体の内部分つまり内臓の働き、消化作用、体液の循環によっても引き起こされるものであり、さらに様々な感情も、例えば幸福は快い刺激、不安は悪い刺激を心に与えると説明されることになった。このような心身の仕組みの再編成のなかで、不健康もまた心身のあたらしい仕組みでもって説明されなければならない。別の言い方をすれば、心身の新しい仕組みによって生み出される不調というものが語られるようになる。先の引用にもでてきた心気症という不定愁訴は、刺激や神経で説明された流行の病であった。

再びクリューガーを引用しよう。彼は心気症を、心と身体双方の刺激から引き起こされると説明するが、同時に、その刺激を引き起こす要因の複雑さから、要因の特定はむずかしく³⁶⁾、ひとことで説明できないと論じている³⁷⁾。それゆえクリューガーは、医師たちに、心気症の原因について拙速な判断は避けるよう呼びかけた³⁸⁾。クリューガーは、刺激の強弱の度合いが法外なほどに揺れること(eine ausschweifende Abwechslung in Stärke)³⁹⁾、そしてその結果ひきおこされる神経の大きな動きが心気症という不調の原因であると説明していた。例えばクリューガーは、強い感情とくに深い悲しみや、想像力の強い働きによっても、心気症は引き起こされると持論を展開している。また仮に睡眠がとれているとしても、かならずしも健康を意味してはいない。もし夢をみているとすれば、睡眠中においても想像力が

33) Vgl. *Conversations-Lexicon oder encyclopädisches Handwörterbuch*, 4.Bd., Stuttgart 1817, S.871.

34) Christoph Wilhelm Hufeland, *Die Kunst das menschliche Leben zu verlängern*, Jena 1797, S.110.

35) 坂井建雄『医学の歴史』医学書院 2019, pp.137-143.

36) Krüger, *Naturlehre*, 3.Bd., 2.Aufl., Halle 1755, S.556.

37) Ebenda, S.588.

38) Ebenda, S.550.

39) Ebenda, S.558.

刺激を發しつづけていることを意味しているのだから⁴⁰⁾。同じように、身体に由来する刺激も要因だ。消化不良や体液の循環不足によってもまた、刺激は引き起こされて、心気症の原因となった。

したがって心気症を抑えるためには、なによりも刺激を抑えなければならない。そのために身体を適度に運動させ、感情を制御することが必要となる。こうした刺激の抑制が、養生の健康維持の教えに通底するものであった⁴¹⁾。身体を動かすことで、体液が循環する。不要物の排出作用を妨げないよう消化によい食べ物を接種し、過度の刺激物は避ける。まちがったタイミングで吐剤や下剤を服用してはならないし、瀉血のしすぎによる衰弱、喫煙は避けられなければならない⁴²⁾。そしてまた、悲しみが癒されないのであれば、楽しい本や、心について省察した本を読んでおさえればよい⁴³⁾。このように心身の双方をふくめた生活スタイル全般に注意する養生が、心気症のような不調の治療にあてはまることになる。

とくに興味深いのが、心の刺激の治療として、良い刺激を積極的に受容することが推奨されている点であろう。ヴォルフラム・マウザーが指摘するように、気のおけない仲間との交流、そして詩、絵画、音楽などの芸術に接することには、神経の過度の緊張を緩和する効果が認められていた。人間性全体の回復を求めて行われた感情を含めた美的教育にもまた、このような良き感情による治療効果が期待されていたわけである⁴⁴⁾。

スイスの医師ティソーの偽名で出版された『夫婦の好奇心を満たす本』は、養生とモラルの繋がりを理解させてくれる好例だ。この本は、人間の身体についての短いトピックが多数おさめられた一般読者向けの医学雑誌であった。タイトルが冠する *curiöse* 「好奇心を満たす」が何を意味していたのかは、全巻の内容を概観すれば明らかで、性的な関心を満たすことを意味していた。その一例として、人間が妊娠する仕組みに、処女の特徴、節度ある性交の仕方といったトピックが確認できる。もちろんこの雑誌でも、流行病である心気症とその養生は関心をひくテーマとしてとりあげられており、第6巻すべてが、このテーマに割かれていた。心気症の原因としては、神経に過度な刺激が繰り返されることによる神経の衰弱と、クリューガーと同じ説明が繰り返されている。身体を動かすことなく、長い時間すわって、頭をつかう作業をしている物書きたちは、過度の心的刺激が続いていることで心気症に陥る。また悲しみから復帰できないほどに感情が支配されてしまっている状態、とくに女性を念頭に、思い

40) Krüger, *Diät oder Lebensordnung*, S.396.

41) Krüger, *Diät oder Lebensordnung*, S.427.

42) Krüger, *Naturlehre*, 3.Bd., S.557.

43) Krüger, *Diät oder Lebensordnung*, S.429.

44) Vgl. Wolfram Mauser, Die »Balsam=Kraft« von innen. Dichtung und Diätetik am Beispiel des B. H. Brockes, in: Udo Benzenhöfer und Wilhelm Kühlmann (Hg.), *Heilkunde und Krankheitserfahrung in der frühen Neuzeit*, Tübingen 1992, S.299-329; S.313.

描いていた結婚が成就できても激しい愛情が抑えられない状態もまたその原因だ。さらにマスターベーションもまた神経をひどく衰弱させる心筋症の原因として指摘されていた⁴⁵⁾。

この『夫婦の好奇心を満たす本』での興味深い議論は、放埒な愛欲が、強い刺激を引き起こすことを理由に、心気症の原因として指摘されていた点である。心気症を回避するために、またはその症状を抑えるために、適切に恋愛し、適度に性欲を満たすことが求められる。そうでなければ、この性の乱れは、身体的な特質として遅かれ早かれ、子どもへと引き継がれることになる。性の乱れた両親から産まれた子どもには、すでに神経の衰弱が認められるだけでなく、かれらは早熟で早い時期からマスターベーションを覚えるというのだ⁴⁶⁾。

このように心気症は、性モラルの乱れが目に見える形になって発症した疾患として語られることになる。このように、性モラルの乱れと刺激とを相関させた議論を念頭におくならば、なぜ養生において、道徳的な心身の規律化が求められたのかを理解することも可能となるはずだ。

不健康をあぶりだすプリズム

「心気症の原因を特定することは難しい。というのも、複数の要因がかさなりあっているだけでなく、こうした要因があったとしても、必ずしも発症するわけではないからだ」。『新ハンブルク誌—自然科学と愉快な科学全般の教えと楽しみのための著作集』は、心気症の原因の特定が困難であるだけでなく、その発症も偶発的であると論じていた⁴⁷⁾。ここまできると心気症は、治癒されるべき疾患というよりも、神経を過度に刺激し、神経を衰弱させる危険因子を選び出すプリズムであったといえるだろう。心気症を誘発するかもしれない危険因子として選り分けられたものをつなぎあわせることで出現してきたのが、都市という空間であった。『健康問答』でも、人を不健康にする空気の悪さの原因は、人口の密集、それにもなう石炭などの燃焼、さらに完備されていない下水処理であると記されていたことは、すでに紹介したとおりだ。人が密集した教会、墓地からの悪臭、ランプに熱せられた劇場の空気。養生法をあつかった著作では、よどんだ空気を吐き出す都市が健康を害する原因として立ち現れてくる⁴⁸⁾。

もちろん都市の空気だけが問題だったわけではない。七年戦争が終結して政治的に安定を

45) [Tissot(Pseud.)], *Das curiöse Ehestands-Buch für Eheleute und Ehestandslustige*, Altona 1792, S.22f.

46) Ebenda, S.21.

47) Vgl. *Neues hamburgisches Magazin, oder gesammelte Schriften zum Unterricht und Vergnügen aus der Naturforschung und den angenehmen Wissenschaften überhaupt*, 120.St., Leipzig 1781, S.493.

48) Vgl. *Briefe über verschiedene Gegenstände der Arztneykunst*, 1.Bd., Langensalza 1776, S.63f; Johann Friedrich Zückert, *Physikalisch diätetische Abhandlung von der Luft und Witterung und der davon abhängenden Gesundheit der Menschen*, Berlin 1770.

取り戻しつつあった当時のドイツ地域では、気候も安定したこともあって、文化や政治の機能が集中した都市とよばれるような生活空間が形成されつつあったことに、人々が気付きはじめたということなのだ。このあたらしい生活空間と、そこでの営まれる生活様式が、不健康をもたらす危険なものとして眺められていたのである。だからこそフーフェランは、養生に、文明批判のトポスを持ち込んで、次のように論じていた。数多くの地理誌に報告されているように、自然人（Naturmensch）⁴⁹⁾は都市の病気には縁がない。かれらは、贅沢、腐敗した道徳、不自然な生活様式、道楽が引き起こすであろうもの全てに、怖れをなすであろう。このような病は過去には認められなかったのであるから、都市で生活を送っている私たち自身に、この病の責任（Schuld）がある⁵⁰⁾。心身の不調の原因は、18世紀末の人々の生活にあるのであって、不健康はこの時代に生きる人々の責任問題である。フーフェラントは、都市にあふれた食材は消化に悪く、身体を動かす機会の減少は体液の循環を妨げる。さらに都市の娯楽は神経を刺激し、都市では比較的アクセスしやすい活字メディアつまり読書もまた神経を疲弊させると、都市生活者にむけて養生の必要性を唱えることになる⁵¹⁾。

心の養生

養生を、より厳密に、心の不調への対応として論じた養生書も出版されていた。ヴェンツェルの『人間の心の養生』は、住環境や食生活の養生は、身体の健康の維持を目的としたものにすぎず、心を不調から回復させ、心の健康を維持する養生法が必要になると論じた著書であった。確かにヴェンツェルは、身体の養生を否定してはいない。彼もまた、消化のよい食べ物と適度な運動を心掛けることによって、消化不良によって内蔵から発せられる刺激を抑えるアドバイスを繰り返している。しかし身体の健康を維持するだけでは、人は美しいものに感動することはできず、また学問への関心も持ちえない。これらは心の不調⁵²⁾に由来するものであり、その治癒には、心の養生が必要となると、ヴェンツェルは心の養生の必要性を主張した。ヴェンツェルが、心を養生する方法として勧めるのが、クリューガーも推奨した社交であった。「快活な人々との社交（Muntere Gesellschaften）によって、悩み事や心配事は霧消し、無気力と不快さも抑えられ、心気症から癒される」⁵³⁾。このように心の健康の維持には、生活の節度を守ることによって身体の調子を整えることは当然のこと、それに加えて社交でもってポジティブな感情をたえず求めることが必要とされた。

49) Hufeland, a.a.O., S.363.

50) Ebenda, S.364f.

51) Vgl. Ebenda, 2.Th, 1.Abs. § 5-7.

52) Gottfried Immanuel Wenzel, *Diätetik der menschlichen Seele oder Gesundheitslehre des Herzens, Verstandes und Willens*, Grätz 1800, S.10.

53) Ebenda, S.138f.

18世紀は社交の世紀⁵⁴⁾と呼ばれるほどに、人々は日々の社交を大切にしていた。当時の日常生活の細かな情報を提供してくれるモーツァルト（と姉ナンネル）の日記や書簡には、モーツァルトの母が旅先で死去した報せを受け取った時も、またモーツァルト一家の友人であったシーデンホーフエンも彼の母が死去した時も、葬儀が終わればいつも通り友人たちと射撃の会を楽しんだことが記録されている⁵⁵⁾。このような行動の背景には、社交でもって心の傷を癒そうとする当時の人々の養生の発想があったと解釈することができるだろう。

心の養生を、教育と関連させて論じたのが、自領レカーンで学校を運営し、みずから教科書を編んだフォン・ロホーであった。「愚鈍さ（Thorheit）、錯誤（Irrthum）は、心の病であり、また幸福の障害です。神が私たちを永遠に幸せにしてくれるという考え方は、ここではあてはまりません。これらの心の病は、ただしい学び（Lehre）によって取り除かれるのであり、お金や祈りで取り除かれることはありません。健康であること、つまり正しく考える心が、健康な身体のうちにあるように、誰もが勉学に務めなければならないのです。」⁵⁶⁾ここには心の不調が、愚鈍さや錯誤といった認識機能の異常さが、「心の病」として定式化されている。そして不調は、信仰によって回復することはなく、ただ身体 の健康の維持と教育による心の矯正によってのみ治癒するというのだ。ここには18世紀の初等教育の思想的背景、つまり教育には心を養生するという関心が込められてことを読み取ることができるだろう。

先ほどは偽名の出版物を登場させたが、本物のスイスの医師ティソーもまた、身体を動かさずデスクワークを続け、夜遅くまで思索に没頭する知識人たちが、心の不調を患っており、その状態を放置すると、頭の働きは弱くなり（schwach）、観念は混乱し（verwirrt）⁵⁷⁾、錯乱状態（Wahnwitz）にまで悪化することがあると注意していた⁵⁸⁾。もちろんティソーが前提としているのも刺激の理論であり、運動不足や消化不良によって発せられる身体の刺激と、長時間の知的活動に伴う心的能力からの刺激の双方によって苦しめられているのが、知識人であると説明している。さらにティソーは、心の病が気付かずに悪化し、一種の無感覚に陥ってしまうこと、さらに悪化すると狂乱し（Raserey）、殺人まで起こすような例もあると⁵⁹⁾、心の養生の必要性を訴えていた。ティソーによれば、新鮮な空気に、刺激を抑える食事の選択というお決まりの養生にくわえて、知的活動で刺激を発し続ける心を休めること⁶⁰⁾、それから少なくとも日に1、2時間の運動をすること、両者を兼ね備えた散歩や乗馬が最適な治療法となる⁶¹⁾。しかしそれだけでは不十分、ティソーは、美や崇高について研究している者

54) Vgl. Ulrich Im Hof, *Das gesellige Jahrhundert*, München 1982.

55) Cf. ギュンター・パウアー『ギャンブラー・モーツァルト』春秋社 2013, p.83.

56) Friedrich Eberhard von Rochow, *Catechismus der gesunden Vernunft*, Berlin 1790, S.10.

57) Samuel Auguste Tissot, *Von der Gesundheit der Gelehrten*, Leipzig 1768, S.21.

58) Ebenda, S.30.

59) Ebenda, S.39.

60) Ebenda, S.96.

61) Ebenda, S.101.

が、それこそ善はながめるだけで、悪事をはたらくようなことがあつてはならないという⁶²⁾。ティソーは、研究に加えて心の健康の維持を、倫理的な行為の前提としても考えていたことになる。カントは哲学者に「感情の養生」の役割をみとめていたが⁶³⁾、心の養生を行うことができるのは、医師というよりも、快活な人々、教育者、哲学者であり、彼らはまた心を倫理的に導くことのできる人たちでもあった。

ティソーの引用において注目すべき点は、心の不調に、錯乱や狂乱といった病名を与えられていたことだ。ただし、これらもまだ心の疾患として体系的に分類されたものではなかった。心の疾患が区別されるのは、19世紀のヨーハン・クリスチャン・ライルやヨーハン・クリスチャン・ハインリヒ・ハインロートのような心の病理学的な研究をおこなう医師たちの登場をまたなければならなかった。しかし重要なのは、心の不調、つまり倫理的に逸脱した行為の原因もまた、病として理解されつつあったことを、ここで認めておく必要がある。18世紀初頭の心的能力の完全性の理論的枠組のなかでは、心が不調であるとすれば、心的能力が完全性にまで到達していない状態として説明されたのであり、心的能力を完全性にまで高めることが心を正常にすることであった、しかし心の不調はもはや能力が発揮されていないことではなく、病として理解されつつあるのである。

このような18世紀後半の養生の言説のなかに、『健康問答』をおきいてみなければならぬ。『健康問答』の受容の背後には、心気症をはじめとする流行の病への不安があったことはいうまでもない。そしてまた、養生は、身体を健康を維持するだけでは解決できない心の病にも対応しようとしていた。初等教育の現場で養生を教えようとする試みは、教育によって心の病に対応するものであったといえるだろう。

62) Ebenda, S.185f.

63) Vgl. Kant, *Gesammelte Schriften* (Akademie Ausgabe), 2.Bd., Berlin 1905, S.271.

Gesundheitsaufklärung – Bernhard Christoph Fausts *Gesundheitskatechismus* in den
diätetischen Diskursen des 18. Jahrhundert

Kotaro YOSHIDA

Dieser Beitrag gliedert sich in zwei Hauptteile. Der erste Teil ist eine Einführung in eine Untersuchung des diätetischen Diskurses des 18. Jahrhunderts, die einen Bestseller, den Gesundheitskatechismus von Bernhard Christoph Faust, mit dem Gesichtspunkt seiner historischen Funktion als Erziehungsmedium beleuchtet und ihn in den Kontext der Populäraufklärung am Ende des 18. Jahrhunderts stellt. Anhand der Kritik von zeitgenössischen Fachmedizinerinnen an Fausts Schriften bestätigt der Beitrag, dass die Diätetik als ideengeschichtliche Prämisse unter einem Spannungsverhältnis zur modernen Medizin stand. Insbesondere durch die Durchsicht der diätetischen Schriften von Johann Gottlob Krüger, Samuel Auguste Tissot, Christoph Wilhelm Hufeland und anderen wird bestätigt, dass die diätetische Theorie auf ein nerven- und reizzentriertes Modell des Körpers beruhte, die sich von der modernen Physiologie unterschied. Ausgehend von dieser Prämisse konzentriert sich dieser Beitrag auf die modischen Krankheiten (Hypochondrie oder Vapeurs), die sich aus diesem Körpermodell ergeben, anstatt die Vormodernität der Diätetik abzuleiten. Schließlich soll in diesem Beitrag gezeigt werden, dass die Diätetik eine Reaktion auf die Unsicherheit war, die durch die neuen, in dieser Zeit entstandenen, städtischen Lebensräume verursacht wurde.